

1. 本研究は、従来家計簿という用語の概念も、中途半端である。営業簿記の反面は、家計簿記と理解すべきである。

簿記に単式と複式とあるも、今日の常識として、簿記は複式であり、すでに Book Keeping の用語は、死語、廃語であり、今日 Accounting の時代である。したがって、この固定的概念を打ち破るため、多角的な視野のもとに、検討されなければならない。その基礎をふまえた上で、視野の偏りをなおすことができる。

2. 従来家計簿は、非公開的であるところに、ウィーク・ポイントがある。むしろ集団により、公開検討するところに、進歩がある。

3. 農家の月給制の問題にしても、家計簿記と、作業日誌の両面から捉えなければならない。このことは、人名別と、作業別の区分計算から、読みこなすことである。

4. これからの家計簿記の利用の仕方は、単に付けるというところに、意味がなく、そのつけた結果を、よみこなすところに、効果を期待することができる。

5. その効果の判定にしても、家計簿記の拡張加工計算として、自家労働の見積にしても同様のことがいえる。なお、家族負担家計費+賄支給額=家計総支出という概念をとるべきである。

容易にして、しかも、すべての条件をみたす簡易な簿記は、ありえないことを知るべきである。